

認知症のわたしたちが、考えていること、いっしょにつくっていききたいこと

(平成 28 年 5 月 19 日 藤田 和子 講師)

認知症 = アルツハイマー病と聞くと、老いと共におとずれて、もう治らない病気であると、少し偏見的なイメージを持っているのが現実です。

今回、初めて若年性認知症の方のお話をうかがえるとのことで、関心を持って講演を聞かせていただきました。

誰もが多かれ少なかれする物忘れ。講演にあったように、朝食食べたものをその日の夕方に覚えているか？と問われると、たいていの場合は答えられると思います。最近、よく忘れ物をするとか物覚えが悪いなと感じるときは、疲れてるのかなあと思う程度で終わってしまいます。それが仮に少し悪化しても、年齢が若いとまずその症状が認知症だと思わないし、もちろん受診には至らないと思います。それが発見の遅れにつながり、空白の時間が生まれることになるのです。また、認知症にステージがあるのも知らなかったので、断片だけ見ても誰も認知症だと認識されないと思いました。そんな中で、受診されたことはすごいことだと思いました。

認知症と診断されても、その人を「もう何も出来ない、任せられない」と扱うのではなく、人権と尊厳を持って接すること。「出来ないことは出来ないけれど、出来ることは出来る」ので、周りの人が決め付けるのではなく、しっかり対話して本人が考えていることを聞いて、助けたり、支えることが大切だと思いましたが、なかなか簡単に出来るものでもないとも思いました。周りの人だけでなく、社会や行政が変わっていく仕組みを認知症の方を交えてニーズを汲み取りながら作っていく必要があります。そのためにはクローバーのような N P O の存在も大きいのだと思いました。

周囲の人や地域、行政、N P O 任せにするのではなく、親しい人、よく知っている人が認知症になったからといって、自ら疎遠になるのではなく、これまでどおりに接すること。また、出来ないことを初めから取りあげるのではなく、一緒に考えて出来ないことをサポートしていかなければなりません。認知症の方にペースを合わせることは、なかなか難しいことですが、それができるようになることは素晴らしい。少しでも本人の意見を聞いてくれるパートナーがいると話せることもあるし、そのような本人の意思が保たれる状況を作り上げていくことや、認知症の方が社会に出ても大丈夫な取り組みをすることが大切だと感じられるようにならなければいけないと思いました。

偏見を解消することがすべての施策の出発点とおっしゃるように、いつ自分や家族が発症するかもしれない認知症にまずはしっかりと向き合い、理解すること。また、一番辛いのは本人なので、決して見放さず、取り上げず、出来ることを無理なく出来るように、工夫しながらサポートしてあげること。そして、本人としっかり向き合い、希望を聞いてあげること。それを自分だけではなく、他の家族や地域で一緒になってすること。また、そのような仕組みの社会にしていくことが大切であると学ぶことができました。決して、他人事として考えずに、これからの人生を生きていきたいと思えます。